

ラビ

毎年エルサレムに巡礼するラビ※がいました。

巡礼の旅はやや長いもので、それゆえラビは、ロバと、道々食事を手に入れることができなかつたときのための雄鶏、そして、夜に明かりをとすためのろうそくを準備しました。

翌朝、エルサレムに向かって出発し、最初の行程はとても穏やかでした。

夕暮れになってある村に到着し、最初に見つけた家で泊めてくれるよう頼みました。砂漠の村々では、宿を求めたり提供したりすることは習慣的なこととなっています。そうしなければ、旅人にとってそれは死の危険を意味するのです。しかしながら、驚いたことに、その家の婦人は彼を泊めることはできない、ほかの家に行ってくださいと言いました。このように、村中、家から家へ回っても、どの家も彼を受け入れてはくれませんでした。

「なんと不思議なことか。」彼は独り言を言いました。「こんなことが起こるのははじめてだ。しかし、神がなされることはすべて、善なるためだ。」とそれ以上は何も言いませんでした。

こうして旅を進めました。村を出ると、ライオンが彼を襲い、ロバを殺してしまいました。

「とんでもない、またか。今からは徒歩で旅を続けなければならないだろう。まだかなりあるというのに。しかし、しかたがない。わたしのためになることなのだろう。神はいつもわたしを愛してくださってきた。」と繰り返し言いました。

そして、すでに暗くなっていたため、ろうそくに火をともして、歩いて旅を続けました。しばらくすると、空が雲で覆われ、ものすごい嵐となりました。風と雨によってろうそくは消え、もはやラビは何も見えませんでした。

「やれやれ、また面倒なことが起こった。なんでこんなことばかりが私に起こるのかわからない。しかし、何かの意味があるのだろう。神は私を愛しておられるのだ。そうだろう？」と、再び言いました。

隠れ家を探すと洞窟を見つけました。その瞬間、狐が飛び出してきて

雄鶏を食べてしまいました。

「今日は、すべてがうまいかない。食べ物までもがなくなってしまうなんて。」

どうすることもできずに、少し眠って次の日の朝を待とうとしました。

その晩はよく眠ることはできずに、早くに目を覚ましました。

起きて洞窟を出ると、前の日に彼を受け入れてくれなかった村でもくもくと噴煙が上がっているのが見えました。

敵が夜に村を襲い、住民全員を殺してしまいました。

突然ラビは、すべてを理解しました。

「そうだ。もし村に泊めてもらっていたら、私は今ごろ、死んでいただろう。なぜどの家も私を受け入れなかったのか、今わかった。そして、なぜろうそくが消え、ライオンがロバを殺してしまったのかも、今わかった。夜、敵が明かりを見ていたら、近づいてきて私とロバを見つけると、ロバを自分のものにしようとするすぐに私を殺していただろう。わかった、わかったぞ。最後は、もし狐が雄鶏を食べてしまわなかったら、きっと朝、夜が明けて雄鶏が鳴いて、そして敵がそれを捕まえるために近づいてきて、私のことも見つけていただろう。」

「今、すべてがはっきりとわかった。私に起こったそれぞれのことには意味があったのだ。神が私を守ってくれたのだ。」

このミドラシュによって、ヘブライの親たちは、私たちに起こる一つ一つのことは、たとえ悪いことのように思えたとしても、そして、そのときには理解できなかつたとしても、意味があるのだということを子どもたちに説明します。なぜならば、不思議にも神は、私たちのためにすべてのものごとのうしろにいるからです。

※ユダヤ教の宗教的な指導者、法律学者。